


 書評

Black DW, Grant JE 原著, 高橋三郎 監訳, 下田和孝, 大曾根 彰 訳

DSM-5® ガイドブック

診断基準を使いこなすための指針

須田史朗

本書は Donald W. Black と Jon E. Grant による “DSM-5® Guidebook” の全訳であり、数ある DSM-5 解説書の中でも American Psychiatric Association (APA) が出版した本家本元の “公式ガイドブック” である。

1990 年代以降、科学は目覚ましい発展を遂げ、さまざまな技術革新が多くの生命現象を可視化することに成功した。精神医学もその恩恵を受け、分子生物学や神経画像、疫学研究によるデータの蓄積が新たな知見と洞察を生み、なおも発展を続けている。ことに臨床研究においては、DSM による疾病分類が果たしてきた役割は計り知れない。2013 年 5 月、APA はおよそ 20 年の時を経て DSM を全面改訂し、DSM-5 を世に送り出した。DSM-5 では作成の基本指針に「DSM-IV 出版以来蓄積されたエビデンスを、変更を行う指針として用いる」という項目が含まれており、これまでの研究成果により提唱、あるいは変革された新たな疾病概念が反映されている。本書の冒頭は「科学とは経験を体系的に分類することである」というイギリスの哲学者 George Henry Lewes の言葉の引用に始まり、「新しい知識に応じて精神疾患の分類——そして、その診断基準——は進化していかなければならない」という一文で締めくくられており（「はじめに」より）、このガイドブックを記した筆者の DSM に対する考えと科学的姿勢が示されている。

DSM-5 は現代精神医学の発展を反映したいわば「正常進化」の形を取ってはいるが、とりわけ DSM-III から続いていた多軸診断システムの廃止とディメンション方式による評価の新たな導入や、児童精神医学領域、神経症性障害における変更箇所の多さなどが臨床現場の混乱を招いたことは記憶に新しい。

本書はそのような臨床家の疑問や戸惑いに答えるべく構成されており、Chapter 1 では DSM 開発の歴史や変遷、Chapter 2 では DSM-5 の使用法と DSM-IV からの変更点のまとめ、Chapter 3～19 では各疾患、症候群における DSM-5 診断基準の解説と tips、Chapter 20 ではディメンション方式で用いられる評価尺度、Chapter 21～22 ではパーソナリティ障害群の代替モデル、今後の研究のための診断基準案の解説が要領よく記載されている。

本書は滋賀医大高橋三郎名誉教授の監訳のもと、獨協医大精神神経医学講座の下田和孝主任教授を中心としたグループにより翻訳が行われた。Chapter 1～2 の DSM 開発の経緯や DSM-IV-TR からの主要な変更点の記述は近代精神医学の発展の歴史を理解する上で大変興味深く、読み物としても面白い。Chapter 3 以降の診断基準の解説では日本語版『DSM-5® 精神疾患の診断・統計マニュアル』や『DSM-5® 精神疾患の分類と診断の手引』の該当項目の記載ページが参照できるようになっており、症例検討会などの現場での使用にも配慮されたものとなっている。文章は平易で大変読みやすく、かなり user-friendly な内容である。タイトル通り、まさに「診断基準を使いこなすための指針」であり、臨床現場での使用に即した DSM-5 解説書の決定版として、研修医・コメディカルスタッフからベテランの精神科専門医まで多くの諸氏に自信を持ってお薦めしたい。今からでも遅くありませんよ。

(自治医科大学教授・精神医学)

●B5 464 頁 2016 年 06 月 定価：本体 9,000 円＋税 医学書院刊